

オオタバコガ

1 形態と生態

- (1) 埼玉県では、平成8年に発生が確認され、年々被害が拡大しています。
- (2) 成虫は体長15~18mm、開張時約35mmで、ハスモンヨウと同様かやや小さめです。幼虫の体色は淡緑色~褐色と個体によって様々です。ヨウ類などの幼虫とは異なり、まばらに毛が生えているのが特徴です。以前から知られていた近縁のタバコガとは成虫、幼虫の形態がよく似ています。
- (3) 卵は直径0.45mm、球形で淡黄色です。越冬した蛹が5月から6月にかけて羽化し、雌成虫が卵を植物の生長点に近い葉や蕾などに1粒ずつ産み付けます。幼虫は5~6齢を経て体長35mm程度まで成長し、土中で蛹になります。
- (4) 本県では、野外での越冬は難しいと考えられていますが、施設内では蛹や幼虫での越冬が可能です。また、成虫は長距離移動をされると考えられています。



写真1 若齢幼虫



写真2 老齢幼虫



写真3 成虫

2 被害の様子

- (1) 野菜、花き類を中心として50種類近い作物を加害しますが、埼玉県で特に被害の大きい作物は、トマト、ナス、ブロッコリー、レタス、スイートコーン、キク、ガーベラ、宿根アスターなどです。
- (2) 幼虫は卵からふ化すると直ちに、植物の内部へ食入します。トマト、ナス、ピーマンのような果菜類では果実に、キャベツ、レタスでは結球内に潜り込み、内部を加害します。また、花き類では主につぼみや花を食害するなど、いずれの作物も農産物としては致命的な被害となります。
- (3) なお、本県では、各作物とも、9~10月に被害が目立つようになります。



写真4 幼虫の食害により穴の空いたナス



写真5 レタスの結球内部を食害する幼虫



写真6 コスモスを食害する幼虫

3 発生について

- (1) 本県では年3～6回発生します。
- (2) 5月から幼虫が羽化し、世代を繰り返すごとに発生量が増え、特に、7月下旬、8月下旬と9月下旬に多く発生します。(右図の赤線は、過去10年間の平均値で、右肩上がりです。)
- (3) 夏から秋にかけて高温少雨が続くと多発生する傾向があります。
- (4) 暖冬の年は、発生が早まる傾向があります。

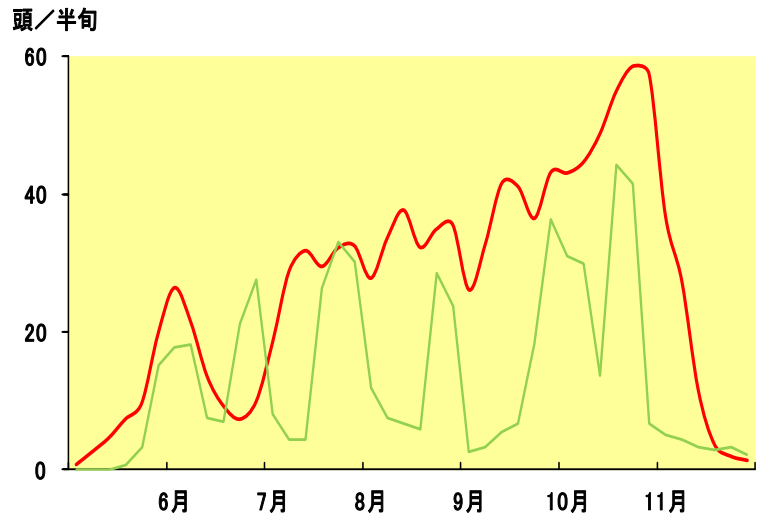


図1 フェロモントラップ誘殺状況 (県内ナスほ場)

赤線:2005年～2014年の平均値

緑線:2014年単年度のデータ

4 防除時期と防除方法

(1) 重点防除時期

ア 世代を繰り返すごとに発生量が増えるので、発生初期の防除を徹底してください。

イ 第1、第2世代成虫の捕殺が最大値(ピーク)となる数日前、6月上旬と6月下旬ごろが重点防除時期となります(図1:緑線参照)。

ウ なお、年によって発生時期や世代数が前後しますので最新年のデータは弊所ホームページ等を御参照ください。

(2) 防除方法

ア 耕種的防除

- ① 新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に必ず幼虫がいるので捕殺します。
- ② 摘心した腋芽や花蕾などには卵や若齢幼虫がつくことがあるので、株元などに放置せず、ほ場外で処分します。
- ③ 施設では開口部に寒冷しゃ等(5mm目程度の防虫ネット)を張って、成虫の侵入を防ぎます。

イ 薬剤防除

- ① 幼虫が作物内に食入してしまうと薬剤散布の効果が劣るので、ほ場をこまめに見回り、被害を確認したら直ちに防除する必要があります。フェロモントラップによる成虫の誘殺状況を防除の目安にすることができます。
- ② 一般的に老齢幼虫に対する殺虫剤の効果は劣ります。
- ③ 同じ系統の薬剤を多用すると薬剤抵抗性が発達するなど、防除効果が劣る場合がありますので、異なる系統の薬剤を交互に散布しましょう。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県